

---

## 十月革命十周年記念の映画

：新収資料 “Soviet cinema: film periodicals, 1918-1942.  
Part 1. Journals, Part 2. Newspapers” (戸山図書館所蔵) より

八 木 君 人

---

### 1.

2004年にロシアで出版された『ロシア映画年代記：1863年から1929年』<sup>(1)</sup>は、その「年代記」という銘にふさわしく、ロシア／ソヴィエトにおける映画作品の製作・公開に関する情報はもちろん、映画政策・産業に関する諸組織の変遷、高等教育機関での講義・報告、出版物、映画評、また国外でのロシア／ソヴィエト映画作品の上映やその反応など、さまざまな出来事を編年体形式で編んだレファレンス・ブックである。同種の先行研究に基づきながら、当時の新聞や雑誌を中心に、数多の資料を渉猟するこの年代記は、疑いなく学術的価値の高い労作である。

しかしながら、こういった高度なレファレンス・ブックを手にしたところで、参照すべきソースが閲覧できないならば、そういった資料を活用してこそ可能になるような映画研究を更に発展させることは不可能である。重要事項の一部には一次資料からの部分的な引用が付記されているとはいえ、学術研究の観点からすれば、安易な孫引きはできる限り避けるべきであろう<sup>(2)</sup>。

ところで、日本における1910-20年代のソヴィエト映画研究では、映画史全般、あるいはセルゲイ・エイゼンシュテインやジガ・ヴェルトフ、レフ・クレシヨフといった、個々の映画作家研究や作品研究に関しては豊富な蓄積があるにもかかわらず、一方で、ソヴィエト時代にマスメディアとして

の映画が果たしていた政治的・社会的役割や当時の観客の映画受容の仕方などに関する研究は、比較的乏しいように思われる。このように研究分野が偏ってしまう最大の原因は、そういった研究を可能にする一次資料へのアクセシビリティが極度に低かったことにあるといえよう。実際、日本国内の大学図書館には、1910-20年代にソヴィエトで発行されていた映画に関する新聞・雑誌資料の所蔵は少なく、端本のいくらかが複数の大学図書館にまたがって所蔵されているのみである。また、ソヴィエトが崩壊し、二十年が経とうとしている現在、ロシア国内での資料の閲覧はかつてほど煩雑なものではなくなってきたものの、閉架式で、自由にコピーをとることも難しいロシア国内の図書館での調査は、すぐれて利便性の高い日本の大学図書館での作業に比べると、甚だしく効率が悪い。

そういった意味で、帝政時代から革命前後のロシア／ソヴィエトにおける大衆紙や映画、演劇や音楽といった大衆文化の出版物のマイクロ資料化・電子化を進めている IDC 出版のシリーズ“Mass Culture and Entertainment in Russia”は、その時代のロシア／ソヴィエト文化研究の裾野を広げるべく、大きな意義をもった企画だといえよう。2008年度、早稲田大学戸山図書館に新収された“Soviet cinema: film periodicals, 1918-1942. Part 1. Journals, Part 2. Newspapers”もそのシリーズの一環であるが、早稲田大学戸山図書館には、同シリーズの“Early Russian Cinema: the Russian cinematographic press, 1907-1918. Part 1, Part 2”も所蔵されているので、帝政末期から第二次大戦開戦直後までの映画関係の主要な雑誌・新聞の多くが揃うことになる。また、グローバル COE プログラム「演劇映像の国際的教育研究拠点」のプロジェクトの一環として収集されている帝政ロシア時代の無声映画のアーカイヴが、今後、積極的に活用できるようになれば、国内外に向けてロシア／ソヴィエト映画史の新たなパースペクティブを呈示・発信していくことも可能となるはずである。いずれにせよ、これらの資料が収蔵されたことは、早稲田大学の教職員・学生にとどまらず、国内外のロシア映画研究者・ロシア文化研究者に広く周知されるべき

であり、それによって多くの研究者が有効に活用してくれることを期待したい。

論者はロシア／ソヴィエト映画史の専門家ではないが、新たに収蔵された資料を閲覧することによって初めて、標題に掲げたロシア十月革命十周年記念の映画に関する、これまで抱き続けていたいくつかの疑問に対し、一定の解答を得ることができた。枝葉末節にかかずらった設問のように映るかもしれないが、時期的にも政策的にも、文化論的に広い射程を孕んでいるように思われるロシア十月革命十周年記念の映画を論じるための前提となる文献学的な作業である。以下、問題の所在と、新収資料を通した調査結果を提示していく。

## 2.

ロシア／ソヴィエト映画研究者の幾人かは、1927年におけるソヴィエト映画界の動向を、革命十周年記念の年という政治的・社会的な要因を指摘しながら言及している。例えば、デニス・J・ヤングブラッドは「1927年は十月革命十周年記念であったので、多くの映画作品がこの出来事を記念するように依頼された」<sup>(3)</sup>と述べており、また、グラハム・ロバーツも「1927年はソヴィエト映画にとって真価が問われるべき年であった。フィクション映画作家もノンフィクション映画作家も二つの記念日〔二月革命と十月革命〕を祝うという挑戦にいどまざるを得ない、そんな年であった」<sup>(4)</sup>とし、多くの映画作家が革命十周年記念の映画の製作にかかわったことを指摘している。

そこでまず、1927年当時の言葉を引用したい。のちに「事実の文学」を標榜することとなるメンバーらによって、1927年から1928年にかけて刊行された雑誌『新レフ』の1927年第10号に、セルゲイ・トレチャコフが寄せた「記念祭の映画」という記事である。彼は、革命十周年記念の映画に関して次のように述べている。

特別な記念日の課題としてソヴィエト映画人たちに求められたのは、1917年10月25日という時季をスクリーンに再現することだった。／課題が統一されることにより、それら作品を比較するという特別な関心が起こり、それらを、同じテーマの四つのヴァリエントとして検討できるようになるのだ。<sup>(5)</sup>

トレチャコフが挙げている「四つのヴァリエント」とは、セルゲイ・エイゼンシテイン『十月』、エスフィリ・シュープ『偉大なる道』、フセヴォロド・プドフキン『聖ペテルブルクの最期』、ボリス・バルネット『十月のモスクワ』という、主に二月革命と十月革命を題材として製作された革命に関する四つの映画作品である。

この四作品は、十月革命十周年記念祭での上映に向けてつくられた作品であり、完全な状態であれ不完全な状態であれ、十月革命記念日にあたる11月7日に十月革命十周年記念映画としてモスクワで上映された作品である<sup>(6)</sup>。しかしながら、エイゼンシテイン『十月』がボリシェビキ政権の肝いりで革命十周年のために製作されたことはよく知られているのに対し<sup>(7)</sup>、ここで挙げられている他の三つの作品の位置づけ、記念祭を飾ることになった経緯、また、これら以外の革命記念の映画作品の有無、そして、そもそもその十月革命十周年記念祭における映画とはいかなるものだったのか等々は、ほとんど知られていない。

例えば、先のヤングブラッドやロバーツを含め多くのロシア／ソヴィエト映画史家が依拠する古典的研究であるジェイ・レイダ『キノ』においても、これらが明確に説明されているわけではない。そこでは「記念の年：1927年」に一章が割かれ、十月革命記念の映画としてトレチャコフと同じ四作品がとりあげられ、エイゼンシテインとプドフキンを対比して記述されたり、それぞれの作品に対する当時の観客の反応や講評を伝えられたりしており、包括的に多くの情報を与えてくれているものの、そもそも革命十周年記念とそれら映画とがどういった関係にあったのかを教えてください

はいない<sup>(8)</sup>。

但し、レイダはトレチャコフの挙げる四作品の他に、グリゴリイ・ボルチャンスキイ脚本、アルノリド・ナイディッチ監督のアニメーション要素を含んだ『十月革命とブルジョワジーの世界』を革命十周年記念の映画として挙げており、従って、革命十周年記念の映画に触れている日本語文献でも、(恐らく)レイダの著作に依拠している記述の中では、同様にこの作品も挙げられることとなる<sup>(9)</sup>。

一方、袋一平は『露西亜映畫史略』の中で、同時代人の証言としてこの革命十周年記念の映画について紙幅を割いている<sup>(10)</sup>。そこで中心に語られているのは革命十周年記念の映画作品の内容であるが、挙げられている作品は、『十月』、『聖ペテルブルグの最期』、『偉大なる道』、『十月のモスクワ』、『チュヴァシ国』、『チャドル』、『十月革命とブルジョワジーの世界』、『これが我らのベラルーシ』、『十年』、『第十一年』と、これまで見てきたものに比べて圧倒的に多い<sup>(11)</sup>。袋はここで、雑誌『キネマ・ニュース』での連載においてこの記念祭に関する詳細を伝えてきたと述べているが、残念ながら、現時点で論者はこの『キネマ・ニュース』を閲覧することができていない<sup>(12)</sup>。

これら先行研究者の間にある、革命十周年記念の映画作品に関する記述の不一致の原因は何なのか。それを追究しながら、革命十周年記念の映画について粗描することが本論の課題となる。

調査を踏まえた上で、結論から言えば、恐らく、祝典としての「十周年記念祭」と1927年全体を示す「十周年記念」とが錯綜し、このような事態を招いていると考えられる<sup>(13)</sup>。どういうことか。トレチャコフの挙げた四作品は十月革命十周年記念日にあたる1927年11月7日にモスクワで上映された作品であり、モスクワにおける革命十周年記念祭の映画である。その他に挙げられている作品は、革命十周年を記念して製作された映画であって、1927年11月7日にモスクワで行われた革命十周年記念祭での上映を目指したものではない。つまり、「革命十周年記念祭の映画」と「革命十周

年記念の映画」の違いである。また、トレチャコフの挙げている四作品は、ソフキノとメジラブポム＝ルーシというロシア共和国の二つの製作所による作品であり、袋が挙げている他の諸作品は、ソヴィエトを構成するロシア以外の各共和国の製作所によるものである。トレチャコフの挙げている四作品以外の公開日は、(少なくともモスクワにおいては)必ずしも革命記念日に当たる11月7日であったわけではない<sup>14)</sup>。

このことは、映画史の文脈で捉えるより、ボリシェビキ政権の政策の一環であった革命記念日の祝典を視野に入れると明確になる。例えば、1918年から1927年の革命記念日の祭典でボリシェビキ政権の採った政策を論じたスーザン・コーベセロが『十月革命記念日、1918年から1927年：政策とイメジャリー』において、革命十周年記念祭で上映された映画として採り上げるのは、トレチャコフと同じ四作品である<sup>15)</sup>。しかし、一方で彼女は、映画史の側からみれば興味を惹く事実を、追究することなく措いている。彼女が引用する新聞記事によると、当初、この十月革命十周年記念祭を彩る映画としてヴェルトフの作品が予定されていたことがわかるのだが<sup>16)</sup>、そのヴェルトフの去就に関しては、彼女は言葉を續けていない。本論では、ヴェルトフが革命十周年記念祭の映画を担当することから外されることも、確認していく。

以下、革命十周年記念映画を巡って、主に新聞資料を用いながら、革命十周年記念祭の映画作品が決定されていく過程を中心に追跡していく。それら十月革命十周年記念祭の映画は、どのような経緯・変遷を経て1927年11月7日の上映にまで到ったのであろうか。

### 3.

1926年5月5日付「プラヴダ」紙面には「十月革命十周年に向けて」というタイトルで、ジョン・リード『世界を震撼させた十日間』の映画化と、脚本コンクールの入選作品を映画化するために、教育人民委員会がソヴィエト人民委員会に200,000ルーブルの出資を要請するという記事が掲載さ

れている<sup>17)</sup>。また、同じ内容の記事は「キノ」(1926年5月18日付)にも掲載されており<sup>18)</sup>、これら二つの記事が、ボリシェビキ政権の文化政策の一環として革命十周年記念祭に向けた映画製作が計画されていることを示す、最初の史料であるといえる。

続いて1926年7月6日付「キノ」の紙面は、「十月革命十周年へ向けて」という見出しで、「十月革命十周年に向けてゴスキノ [国立映画] は、ソ連邦の十年の生活を映すような大きな芸術映画を製作する。この映画を作るのはエイゼンシテインで、撮影はティッセになるだろう。/ジガ・ヴェルトフは大きなフロニカ映画 [ニュース映画] を製作している。/また農村に関する脚本のコンクールも計画している」<sup>19)</sup>と伝えている。ここでは、十周年の映画製作を委ねる具体的な監督としてエイゼンシテインとヴェルトフの名前が挙がっており、それぞれが、芸術映画とフロニカ映画という異なるジャンルの作品を製作することが伝えられている。また、最初の史料と同様に、脚本コンクールについても触れられている。

そして1926年9月には、より具体的な計画を示す二つの記事が、『共産主義革命』1926年第18号(9月号)と1926年9月28日付「キノ」とに掲載される。この二つの記事は、9月14日にアジプロ部での会議で議論された同一のプランについての報告であるが、情報に揺れがあるため、ここでは煩雑になることを恐れず両者を提示しておきたい。

『共産主義革命』の記事によると<sup>20)</sup>、全ソ共産党中央委員会アジプロ部が、「十月革命十周年記念日にむけて、様々な視点から十月革命を映し出す、基本となる三つの大きな作品を作ること」を決定しているという。ここではまず、『世界を震撼させた十日間』を原作とするような作品の製作をエイゼンシテインに任せることが述べられており、そして、残りの二つの作品に関しては次のように記されている。「第二の映画はフロニカ映画の私たちで、ソヴィエト建設の十年間を映し出すことになる。描き出されるのは、我らの民族共和国の生活や日常、また、我らの革命のもつ国際的な影響である。この作品の製作は、ジガ・ヴェルトフに委ねられる予定である。

第三の作品は『十月のための戦い』というテーマで、ゴスヴォエンキノ [国家軍事写真映画事業部] が製作し上映する。ヴェルトフにフロニカ映画を任せるといふ点はこれまで検討してきた記事と同様であるが、これまで提起されていた脚本コンタールの案は（次の記事からもわかるように）消滅し<sup>21)</sup>、第三の映画としてゴスヴォエンキノによる映画製作の計画が挙げられている。

そして、1926年9月28日付「キノ」紙面の比較的大きな記事「十月革命十周年へ向けて」においても、これら中心となる三つの仕事に関してはほぼ同じことが報告されている。引用しよう。

[革命十周年に向けての] 中心的な仕事としては、三つの映画作品の準備が挙げられる。一つは大きなフロニカ映画作品で、二つは芸術映画作品だ。／最初の、フロニカ作品はジガ・ヴェルトフに委ねられており、主にそこで呈示されるのは、作られつつある社会主義時代の巨大な農場建設、少数民族の生活における革命の担う役割や影響、また国際社会における十月革命の反映である。／次の芸術作品は、C・M・エイゼンシテインに委ねられ、直接的に、レニングラードやモスクワ、そしていくつかの大きな街での十月の政変の日々に捧げられる。作品の土台となるのは、ジョン・リード『世界を震撼させた十日間』である。／第三の芸術作品『十月のための戦いで』はゴスヴォエンキノが製作し、赤衛軍や赤軍の設立、内戦時代に捧げられる。<sup>22)</sup>

『共産主義革命』の記事と同様に、ヴェルトフ、エイゼンシテイン、ゴスヴォエンキノに十周年記念映画の製作が委ねられることが伝えられている。それに加えて、これまで検討してきた部分では見られなかった計画として以下のことが記されている。

その他に予定されているのは、よりエピソード的な性質をもつ

『モスクワの十月』をテーマとした一つの芸術映画をメジラブポムに任せ、そして、もう一つをかつてのレニングラード・キノ、現在のレニングラードのソフキノ製作所に任せる。後者の映画としては、『二台の装甲車』のテーマが用いられるかもしれない。<sup>23</sup>

ここでは、新たに二本の映画の計画が持ち上がっており、メジラブポム＝ルーシとレニングラードのソフキノによって製作されることが伝えられている。二つの記事をまとめると、この時点で、合計五本の革命記念映画がロシアにおいて計画されており、国家が直轄している映画製作所のみならず、民間の国際合弁会社であるメジラブポム＝ルーシも参加していることがわかる。そして、具体的に監督として名が挙がっているのは、この時点ではまだエイゼンシュテインとヴェルトフのみである。

また、ロシア以外のソ連邦の共和国における十周年記念映画事業に関して、同じ「キノ」の記事で伝えられているのは、それぞれの共和国の映画組織が、それぞれの国における1917年の変革およびその影響をテーマに製作し、それぞれの国の共産党のアジプロ部が製作を監督するという基本方針である。このことに関連して記事では、アゼルバイジャンのゴスキノとソフキノが合同製作する作品『26』について触れられている（『共産主義革命』でも、「地方における十月革命を描く作品で中心的なものとなるのは『バクー人民委員26人の銃殺』で、ゴスキノとアズゴスキノ [アゼルバイジャン・ゴスキノ] という二つの組織によって、十周年に向けて製作される」と報告されている）。これらの記述から、少なくとも形の上では、ロシアとその他のソヴィエトを構成する共和国との映画事業には、区別が設けられていることが確認できるだろう。従って、前節で触れたように、ペロゴスキノ製作の『十月革命とブルジョワジーの世界』はこの点でも、ロシア共和国で製作された作品とは区別されるべきであり（この点でレイダの記述は誤解を招くといえる）、あるいは逆に、『十月革命とブルジョワジーの世界』を「革命十周年記念の映画」として挙げるならば、袋が伝えているように、アゼルバイジャン

やウクライナ、グルジアなど、ロシア以外の共和国で製作された革命十周年記念の映画も含めるべきである（但し、この場合は、革命記念日にあたる11月7日にモスクワで公開されたという祝典的な意義は持たない）。

また、他にも「キノ」の同じ記事では、グラトコフ『セメント』を原作とするセミヨーン・ティモシェンコ『第三タービン』（1927）や、農村をテーマに扱った映画としてエイゼンシテイン『全線』（1929）も十周年記念の映画に加えられる可能性があること、また、ソフキノから革命直前の数日間に関する短いフロニカが出ることが伝えられている<sup>24)</sup>。

これに続き、1926年10月5日付「キノ」では、ソフキノで開催された『[世界を震撼させた] 十日間』に関する作業部会で、エイゼンシテインがその製作に最終合意したことが伝えられている<sup>25)</sup>。そして、1927年3月5日に政治教育総局から、映画を含めて十月革命十周年記念の準備に関する通達が各署へ出ているという<sup>26)</sup>。

次に、我々の注意を惹くのは、1927年4月5日付「キノ」紙面の記事「十月革命十周年へ向けて：ソ連邦中央執行委員会にて」である<sup>27)</sup>。この記事の冒頭で、1926年11月22日、ソ連邦中央執行委員会において、革命十周年記念日を組織・実行すること、アジテーション・スペクタクル煽動的見世物部会を設立することが議決されたことが伝えられている。また、既にその年の11月に記念日を控えた時期だけあって、ここでは具体的な作品や監督が詳細に挙げられている。引用する。

十周年に向けて製作されているのは以下の作品である。ソフキノでは、1. 『十月』、テーマは「十月の政変の歴史」、監督はエイゼンシテインとアレクサンドロフ、2. 『世界を震撼させた十年』、ソ連邦建設の十年間を映し出すフロニカ映画、3. 『装甲車』、監督はエルムレール、4. 『隠れ家からコミュンまで』、芸術映画、5. 「十月革命」をテーマにした子供用映画。そしてメジラブポム＝ルーシでは、1. 『ベテルブルグーベトログラード＝レニングラード』、監督はブドフキン、2.

『十月のモスクワ』、監督はメイエルホリド。ゴスヴォエンキノでは、1. 『ソ連邦の赤軍』、2. 『十月革命のための戦いで』である。

一読して明らかなのは、これまでの記事と比べて作品数が増えていることである。但し、1929年に出版されたボルチャンスキイの編集した『映画便覧』を参照しても<sup>28)</sup>、引用にある作品を具体的に特定することは困難である。まず、ソフキノ製作の4と5にあたる『隠れ家からコミュニケーションまで』と「『十月革命』をテーマにした子供用映画」が何を指すのかを明らかにすることはできなかった<sup>29)</sup>。次に、ソフキノ製作の3の『装甲車』は、1926年9月28日付「キノ」の記事に『二台の装甲車』として記されているものと同一と思われるが、これは1928年初頭に公開された『二台の装甲車』を示すと考えられる。但し、この作品の監督は、引用にあるフリードリヒ・エルムレールではなくティモシェンコである。また、ゴスヴォエンキノ製作とされる『ソ連邦の赤軍』は、『ソ連邦を警護する赤軍』（1927年4月公開）か『赤軍の真実』（1928年2月公開）を指していると思われるが、同じく挙げられている『十月のための戦いで』と同様に、『映画便覧』や当時の広告などを参照してみても、それぞれ同一タイトルの作品は見つけることはできなかった。

さて、本論で重要なのは残りの作品である。まず、具体的に挙がっているメジラブポム＝ルーシ製作の二作品について補足しておく、『ペテルブルグーペトログラードーレニングラード』は『聖ペテルブルグの最期』として完成する作品であり、『十月のモスクワ』はメイエルホリドではなく、バルネットが監督の作品である。また、ソフキノによる『十月』は、以前とかわりなくエイゼンシテイン（とアレクサンドロフ）の名が記されているが、一方で、注目を引くのは、フロニカ映画の監督を担うことになっていたヴェルトフの名が消えてしまっていることである。

この記事では他にも多くの作品が挙がっており、上の引用に続いてウクライナやグルジア、アゼルバイジャン、ベラルーシ、チュヴァシにおける

革命記念映画事業の様子が伝えられているものの、以下で確認するように、記念日が更に近づくにつれて、革命十周年記念の映画として紙面で採り上げられるのは、実際に1927年11月7日にモスクワで上映された四作品のみに絞られていく。その四本以外の他の作品の行方は本論では触れず、ヴェルトフが担当を外されたことについてのみ補足しておきたい。

ヴェルトフは1926年12月に公開された<sup>30)</sup>『世界の六分の一』のあと、当時ソフキノの理事をしていたイリヤ・トライニンと諍いを起こし、1927年1月4日にソフキノを解雇され、ウクライナへ向かっている<sup>31)</sup>。彼の作品の中でも卓越した『第十一年』(1928)と『カメラを持った男』(1929)は、全ウクライナ写真映画管理局のもとで製作されたことになる。そしてもともとは、依頼されるはずだった革命十周年記念祭のための作品として、『第十一年』は構想されていたようである<sup>32)</sup>。ヴェルトフの1927年1月28日付手稿には自らの解雇の不当性を訴える文章が残されているが、その中に、革命十周年記念映画に関係する部分がある。そこでは、製作にあたってのトライニンによる妨害が述べられている。

第一に、十月革命十周年へ向けての**基本**となる映画に取り組むために必要な映画素材のすべて（ネガとポジ）を与えず、同志トライニンは、全ソ共産党中央委員会アジプロ部の決議に反して、非常に価値のある事実の映画素材すべてを、別の目的で、決して一度もフロニカ映画をつくったことのない他人へと渡しているのだ。……[第二として、予算を十分に与えてくれないことを挙げた上で]それでもって、製作不可能な条件に私を立たせ、かつ**形式的には中央委員会のアジプロ部の決議を破棄することなく、同志トライニンは**実際的にこの決議を阻止するように導いたのだ。****<sup>33)</sup>

トライニンによってフロニカ映画が製作できない状況に追い込まれてしまった事実を、ヴェルトフはこのように綴っている。

一方、当時のシューブの回想を読むと、1927年3月11日に公開され好評を博した彼女のデビュー作『ロマノフ王朝の崩壊』の製作段階から、トライニンが好意的に彼女に力添えしていたことが伺える<sup>64</sup>。彼女の回想によれば、この作品は、試写の段階では『二月』という仮タイトルが付けられていたが、トライニンの提案によって現在のものになった（その上、トライニン自身が広告ポスターの案を提起したという）。また、正確な時期は明らかになっていないものの、この『ロマノフ王朝の崩壊』の試写と同じくらいの時期に、アメリカで買い上げられたソヴィエトを撮ったフロニカのフィルムが、彼女のもとに届けられている。その中に彼女は、それまで誰にも知られていなかったレーニンが撮影されているショットを見つけたのだが、トライニンはすぐさまそのことをレーニン研究所へ報告し、研究所ではネガの複製が作成され、保管されることになった。これらの事実から、少なくともこの時期にはシューブとトライニンの間に非常に友好的な関係があったことがわかるだろう。

これらの状況を勘案すると、革命十周年記念のためのフロニカ映画の監督が、これまで委ねられていたヴェルトフからシューブへと移ったと推察でき、上に示した1927年4月5日付「キノ」の記事からヴェルトフの名が消えているのは、そのことを反映していると考えるのが妥当である。

#### 4.

さて、革命十周年記念日まで一ヶ月足らずに迫った1927年10月18日付「キノ（レンングラード）」の記事「十月革命の祝典へ向けて」は、レンングラード・ソフキノが記念日に行う事業の一環として、映画作品の上映に関する次のような企画を伝えている。

三本の記念映画作品ができつつあるが、それは、エイゼンシテイン『十月』、シューブ編集『十月革命の十年間』、そしてメジラブポム[製作]の『モスクワの十月』だ。これら作品は、レンングラードの中心部や

郊外のメジャーな映画館で上映される予定だが、同様に、勤労者代表地区ソヴィエト総会の祝典会議でも上映される。<sup>35)</sup>

ここではプドフキン『聖ペテルブルグの最期』が挙がっていないが、これは、レニングラードでは『聖ペテルブルグの最期』の公開が11月7日ではなかったことを示していると考えられる（実際、11月7日付「キノ（レニングラード）」の紙面広告にはプドフキンの作品の告知はない）。

革命記念日直前の1927年11月1日付「キノ（レニングラード）」の記事「十月革命への映画作品」では<sup>36)</sup>、「十月革命の事件の十周年に向けてソヴィエト映画界に、革命の歴史をスクリーンに呈示する課題が立てられた。そこに、作品をつくるにあたっての多くの可能性と方法とが浮かんできていた」と冒頭で述べられ、それぞれの内容に触れながら四本の作品が挙げられている。その四作品を記事で挙げられた順に示すと、シューブ『偉大なる道』、エイゼンシテイン『十月』、バルネット『十月のモスクワ』、プドフキン『聖ペテルブルグの最期』である。

そして、記念日を終えた1927年11月9日付「プラヴダ」には、記念日の映画の講評としてセルゲイ・エルモリンスキイ「十月革命の映画」が掲載された<sup>37)</sup>。前置きなくそれぞれの作品に言及していくその講評では、『十月』には全く触れられておらず、『聖ペテルブルグの最期』、『十月のモスクワ』、『偉大なる道』の三作品のみが言及されている。それは、1927年11月15日付「キノ（レニングラード）」の記事「『十月』を観る」でも報告されているように、「映画『『十月』』はまだ仕上がっていない状態で上映され、最終的な編集は終わっていないかった」ことが原因であるといえる<sup>38)</sup>。『十月』が再編集を経て改めて一般公開されるのは1928年3月14日であり、『十月』への反応が新聞・雑誌を賑わすのはそのときである。しかしながら、1927年11月15日付「キノ」の記事「十月革命の映画」では、「十月革命記念の祝典時とその前に、ソフキノとメジラブポム＝ルーシが、党に属する公的な機関として、各自の十月革命記念の映画を上映した」として、『十

月』を含めた、『偉大なる道』、『聖ペテルブルグの最期』、『十月のモスクワ』の四作品上映されたことが告げられている<sup>99)</sup>。

ここまで検討したように、紆余曲折を経たものの、ソフキノとメジラブポム＝ルーシが製作した、『十月』、『偉大なる道』、『聖ペテルブルグの最期』、『十月のモスクワ』の四作品が、1927年11月7日の十月革命十周年記念日にモスクワで上映されたという意味での、十月革命十周年記念映画である。また、このことを確認する過程で、当初、革命十周年記念の映画製作に名を連ねていたヴェルトフが外されたことも跡づけることができた。

トレチャコフが提起していたように、「スクリーンで革命を呈示する」という共通テーマに挑む、これら全く特徴の異なる映画作品を比較・検討すること、あるいは、それらの作品を巡る言説を精査することは、文化論的に興味深い研究である。新聞や雑誌では、改めて公開された『十月』に関する論評やアンケートが量的に群を抜いているが、他の三作品への評価を踏まえて比較しながら、同時代人が革命に対する適切な映画表現をどこに見出したかを検討することは重要である。また、レーニンによって最も重要な芸術として位置づけられていた映画は、必然的に、ソヴィエト成立の端緒からアジテーション・プロパガンダの機能を期待され、それを担うべく道を歩みを進めた。1920年の革命三周年記念祭を彩ったのがニコライ・エヴレイノフを中心とした群衆劇であったことを思い起こせば、映画によって祝われた十周年までのわずかな期間に推移した、大衆と政治、そしてマス・メディアとしての芸術＝映画の関係を、微視的に検討することも必要であろう。これらの問題に関しては、今回の成果を踏まえ、稿を改めて論じていきたい。

## 註

- (1) Легопись российского кино: 1863–1929. М.: Материк, 2004. なお、1930年から1945年を扱った続編は2007年に同じ出版社から発行されている（Легопись

российского кино: 1930–1945. М.: Материк, 2007)。

- (2) 論者は今回の調査で同書をしばしば参照したが、その過程で、新聞記事が掲載された日付に関して、一箇所とはいえ誤りに出くわしている (Там же. С. 532. 正しい情報は註(11)で記したものである)。
- (3) Denise J. Youngblood, *Soviet Cinema in the Silent Era, 1918–1935* (Michigan: UMI Research Press, 1985), p. 151.
- (4) Graham Roberts, *Forward Soviet!: History and Non-fiction Film in the USSR* (London and New York: I. B. Tauris, 1998), p. 50.
- (5) Третьяков С. Кино к юбилею // Новый Леф, №10, 1927. С. 27.
- (6) 但し、他の作品を含め、特に『十月』の上映日に関しては先行研究の記述には相違があり、厳密には細かい説明が必要である。六巻本のエイゼンシュテイン著作集第六巻に収められている『十月』のシナリオについての注釈の中では、「しかし、十月革命の記念日までに映画は間に合わず、ボリショイ劇場でひらかれた11月6日の祝典会議の際に上映されたのは、第二部の断片のみであった」と述べられており (Эйзенштейн С. Избранные произведения в 6-томах. Т. 6. М.: Искусство, 1971. С. 528. なお、邦訳として次を参照した：田中ひろし訳「『十月』のシナリオについて (原注)」『エイゼンシュテイン全集 第1部：人生におけるわが芸術 第3巻：革命の映画』キネマ旬報社、1975年、89頁)、レイダ『キノ』においても「メジラブポムとブドフキンが11月7日のレースに勝ったのだ。『十月』は、その日より前に、その一部がプライベートに上映されたのだが、ボリショイ劇場での祝典の観客たちが見たのは、『聖ペテルブルグの最期』と『十月のモスクワ』のみであった。シュープの『偉大なる道』はその前日に一般公開されていた」と述べられており (Jay Leyda, *Kino: A History of the Russian and Soviet Film* (London: Ruskin House, 1960), pp. 235)、両者共に、1927年11月7日のボリショイ劇場では『十月』が上映されなかったことを伝えている。一方、先の六巻本著作集の注釈で参照を勧められている、クラソフスキ「映画『十月』はいかにつくられたのか」では、「11月7日に、ボリショイ劇場の分館である実験劇場で、『十月』の第二部の断片が上映された」と記され (Красовский Ю. Как создавался фильм «Октябрь» // Из истории кино: документы и материалы. М.: Искусство, 1965. С. 59)、また、近年、エイゼンシュテインの伝記を記したオクサナ・ブルガーコワは「11月7日には二つの作品だけがボリショイ劇場で上映された。それはブドフキンの『聖ペテルブルグの最期』とバルネットの『十月のモスクワ』である。エイゼンシュテインの未完成の作品は、のちに実験劇場と呼ばれるボリショイ劇場の分館で上映された」と述べており (Oksana Bulgakowa, *Sergei Eisenstein: a Biography* / trans. by Anne Dwyer, (San Francisco: Potemkin

Press, 2001), p. 76)、リチャード・テイラーもブルガーコフを追認している (Richard Taylor, *October* (London: BFI Publishing, 2002), p. 82)。これらの記述は、ポリシヨイ劇場ではなく実験劇場での上映という点で、著作集の注釈やレイダの記述との齟齬はないように解釈できなくはない。続いて指摘したいのは、『ロシア映画年代記』では、1927年11月7日に、「С・М・エイゼンシュテイン『十月』(ポリシヨイ劇場において)、Э・И・シューブ『偉大なる道』、В・И・ブドフキン『聖ペテルブルグの最期』の一般試写会が催され」、「Б・В・バルネット『十月のモスクワ』(メジラブポム＝ルーシ製作)が公開された」と記されていることだ (Летопись российского кино. С. 589)。新聞・雑誌資料のみの調査では、これら纏れた糸を解きほぐすことができなかった。従ってここでは、最大公約数的な表現を用いた。

- (7) よく知られているように、『十月』の冒頭には「ソ連邦中央執行委員会付属十月革命記念委員会の要請による」という字幕が入っている。また、革命十周年記念の映画製作に関する党からの要請にエイゼンシュテインが応じる経緯は以下に詳しい：*Красовский. Как создавался фильм «Октябрь»*. С. 40-41.
- (8) Leyda, *Kino*. pp. 222-225, 234-239.
- (9) 但し、レイダの著作でも、『十月革命とブルジョワジー』に関しては、名前が挙げられている程度で、その内容についてはほとんど語られていないため、この作品についての日本語文献の記述には多少の混乱がみられる。例えば、マリー・シートン『エイゼンシュテイン 上 1898-1932』(佐々木基一・小林牧訳、美術出版社、1966年)の訳注(279頁)や山田和夫『エイゼンシュテイン』(紀伊國屋書店、1994年、105頁)は、レイダと同様に革命十周年記念の映画として五つの作品を挙げているが、『十月革命とブルジョワジーの世界』の監督をボルチャンスキイとしている。
- (10) 袋一平『露西亞映畫史略』往来社、1932年。91-102頁。
- (11) 前掲書。但し、作品名の表記に関しては、本論に合わせて、適宜、変更した。また、『露西亞映畫史略』では、本文で挙げた『「十年」』が『「十月」』と表記されているのだが、同書に含まれる作品情報から判断すれば、『「十年」』の誤りであることがわかるので、本論では『十年』としておく。
- (12) この雑誌は国立国会図書館にも所蔵されていない。但し、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館図書室にはこの雑誌の第1号と第16号が所蔵されており、後者(1927年2月1日号)には確かに袋一平による「ロシア通信」というモスクワ現地からのレポートが掲載されている(袋一平「ロシア通信」『キネマ・ニュース』影繪社、第16号、1927年2月1日号、18, 23頁)。
- (13) 袋は「十月革命十年祭」を認識しながら、「十月革命十年祭記念映畫」として

先の十作品を挙げている。

- (14) 『ロシア映画年代記』によれば、例えば、『チャドル』の公開は12月30日となっており、『十月革命とブルジョワジーの世界』に関しては特定の日付が挙げられていない（*Летопись российского кино*. С. 593-594）。
- (15) Susan M. Corbesero, “The Anniversaries of the October Revolution, 1918-1927: Politics and Imagery” (PhD. diss., University of Pittsburgh, 2005), pp. 179, 187-189.
- (16) Ibid. p. 179.
- (17) Правда. 05. 05. 1926.
- (18) Кино. 18. 05. 1926. С. 3.
- (19) Кино. 06. 07. 1926. С. 2. なお、引用中の下線は論者による強調を示し、原文での強調はゴシック体太字で示す。また、ソヴィエトの映画製作所・組織等の名称の訳語は次に依拠した：山田和夫『ロシア・ソビエト映画史：エイゼンシュテインからソクーロフへ』キネマ旬報社、1997年。引用にある「ゴスキノ」とは、モスクワの国営映画製作・配給機関であり、1925年には輸出入機能を含む「ソフキノ」に発展した（同書、94-95頁）。
- (20) В Агитпропе ЦК // Коммунистическая революция. №18. Сентябрь, 1926. С. 52-53.
- (21) コンクールが中止された直接的な契機ではないだろうが、トレチャコフが既に1926年8月3日付「キノ」で、提案されていた脚本コンクールに否定的見解を述べていることを指摘しておく（*Третьяков С. Опять Конкурс // Кино*. 03. 08. 1926）。
- (22) Кино. 28. 09. 1926. С. 1.
- (23) Там же.
- (24) この短いフロニカに関しては、『共産主義革命』でも言及されている（В Агитпропе ЦК. С. 53）。なお、ヴェルトフによればこのフロニカも彼に任せられていたという（*Вертов Д. Из наследия*. Т. 2. М.: Эйзенштейн-центр, 2008. С. 124）。
- (25) Кино. 05. 10. 1926. С. 1.
- (26) Летопись Российского кино. С. 568.
- (27) Кино. 05. 04. 1927. С. 5.
- (28) Кино-справочник / Сост. и ред. Г. Болтянский. М-Л.: Теа-кино-печать. 1929.
- (29) この時期、子供のための映画の議論が新聞・雑誌上で活発に行われており、1927年10月10日には子供用の映画館がモスクワに開かれてさえいる（Leyda,

*Kino*, p. 231)。革命をテーマにした子供用映画の案は、そういった潮流に則って提起されたものと考えられる。

- (30) Комментарий // *Вертов Д.* Из наследия. Т. 1. М.: Эйзенштейн-центр, 2004. С. 488; Летопись Российского кино. С. 552.
- (31) *Листов В.* Жизнь и страдания молодого и немолодого Вертова // *Вертов.* Из наследия. Т. 1. С. 7. なお、『世界の六分の一』を巡るソフキノとヴェルトフの対立、および作品としての『世界の六分の一』への批判に関しては以下に詳しい: *Youngblood, Soviet Cinema*, pp. 138-142.
- (32) *Вертов.* Из наследия. Т. 2. С. 124, 509.
- (33) *Вертов.* Из наследия. Т. 2. С. 124.
- (34) *Шуб Э.* Крупным планом // *Жизнь моя – кинематограф.* М.: Искусство, 1972. С. 101-105
- (35) Кино (Л.). 18. 10. 1927. С. 1.
- (36) Кино (Л.). 01. 11. 1927. С. 1.
- (37) *Ермолинский С.* Кино к Октябрю // *Правда.* 09. 11. 1927. С. 3.
- (38) Кино (Л.). 15. 11. 1927. С. 1. 『十月』の完成の遅れや再編集に関しては、既に多くのエイゼンシュテイン研究があるのでここで屋上屋を立てるようなことはしない。但し、このことに関連したスターリンによる個人検閲についての事実関係は、日本語で読めるものも含め、先行研究の間でも扱い方に相違があることは指摘しておきたい。例えば、山田和夫は、「1998年1月にゴスフィルモfond（ロシア国立映画保存所）で『十月』のサイレント・オリジナル版（カット前のもの）を見せてもらい、このこと [= トロツキイ登場シーンの除去] を確認した。……エイゼンシュテインは『十月』でスターリンによる最初の介入を体験した」と述べ、スターリンの介入を指摘している（山田和夫『エイゼンシュテイン：映像世紀への飛翔』新日本出版社、1998年、74頁）。一方で、ブルガーコワは、『十月』に対するスターリンの個人検閲に関して、「多くはこのスターリンの編集室への訪問をアレクサンドロフの作り事と考えているが、しかし、上からの力が働いてエイゼンシュテインがトロツキイを映画から除去したことは否定できないだろう」と慎重に述べている（*Bulgakowa, Sergei Eisenstein*, p. 75）。エイゼンシュテイン自身が遅れの原因について直接的に言及したものとしては以下がある：*Эйзенштейн С.* Почему опоздал «Октябрь» // *Кино.* 20. 12. 1927. С. 4.
- (39) Кино. 15. 11. 1927. С. 7.

(やぎ なおと 文学学術院助手)